

# 五音韻譜の小篆字形のデータベース化と ISO/IEC 10646 小篆提案への適用分析

鈴木俊哉<sup>†</sup>、塚田雅樹<sup>‡</sup>

概要: ISO/IEC 10646 への説文小篆追加は、まず典拠の文字集合を宋刊大徐本と定め、清代の藤花樹本を元にグリフ作成が進行している。しかし、藤花樹本は必ずしも宋刊大徐本を忠実に翻刻したのではなく、清代の汲古閣本の影響を強く受けている。近年、この汲古閣本の小篆字形は、明板五音韻譜に由来することが指摘された。明代の出版物は宋元代の出版物に比べ誤りも多いとされるが、宋板の五音韻譜の段階で校正された部分もあるため、現存する宋刊大徐本との違いが全て明代の誤刻というわけではない。前稿で報告した「藤花樹本と陳昌治本にやや目立つ違いがあるもの」について、その違いが持ち込まれた時期を検討するため、作成中の五音韻譜の小篆データベースを用いて予備的に調査した。その結果、汲古閣本と宋刊大徐本の違いには宋板五音韻譜の段階での改変が無視できない割合で含まれることが判った。

キーワード: ISO/IEC 10646、標準化、説文解字、小篆、藤花樹本、陳昌治本

## Database of Seal Glyphs in Shuowen Jiezi Wuyun Yunpu

suzuki toshiya<sup>†</sup>, Tsukada Masaki<sup>‡</sup>

**Abstract:** Currently a project is being developed to include Shuowen (SW) Seal to ISO/IEC 10646, its first target is the character set defined by the DaXu version (a text compiled by Xu Xuan in early Northern Sung dynasty), and the Tonghuaxue print (THX) is decided to be the referential material to design the first font set, instead of the most widely used print by Chen Changzhi (CCZ). But the THX is not the simple duplication of the DaXu version printed in the Sung dynasty. Recently it was revealed that some modifications in the Jiguge print were imported to the THX print, and the source of the Jiguge print was Shuowen Jiezi Wuyun Yunpu (WYYP), a reordered version of SW which was widely used in the Ming dynasty. We constructed a glyph database of WYYP, and we applied it to the analysis of the historical difference between THX, CCZ and the original DaXu text (in the Haiyuan print), and it was found that many differences were already happened in the WYYP in the Southern Sung dynasty print.

**Keywords:** ISO/IEC 10646, Standardization, Shuowen Jiezi, Seal script, Tonghuaxie, Chen Changzhi.

### 1. はじめに

前稿の鈴木・塚田 2020 で報告してきたように、ISO/IEC 10646 に説文小篆を追加する計画が進行している。「説文小篆」と言った場合に、どのような文献を典拠としてグリフを収集するかという問題には様々な立場がある。現時点では、もっとも基本的な集合として宋刊大徐本の見出しとなっているものに絞り、最初の例示字形案は藤花樹本を元にデザインすることとなった。この選定は、当初は「現存する宋刊大徐本は印刷が不鮮明なので、より鮮明な翻刻本として(宋刊大徐本を清代に忠実に翻刻したとされる)藤花樹本を選んだ、(同様の清代の翻刻本であるところの)平津館本や陳昌治本は改変が多く不適切である」と主張されたが、実際にはそのような書誌学的評価ではなく、通行の影印本からスキャンデータを作成する際の文字サイズの大きさに選ばれたと思われる。

前稿では、藤花樹本に基づく例示字形案と、大徐本の定本として広く参照されてきた陳昌治本の小篆を比較した。その結果、字形差が視認できるものが 900 個以上あり、うち 100 個以上は視認が容易な字形差を持っていた。前稿で

はその字形差の起源については典型的なシナリオを挙げるに留まり、分析や計量は実施しなかった。そこで、本稿では前稿で調査したものうち「字形差が視認でき、楷書字形に対してもその字形差が反映可能ではあるが、一方から他方を連想することが容易なもの」(前稿でいう種別 B、89 組)、「字形差が明確で、一方を見て他方が別字扱いされているか判断が難しいもの」(前稿でいう種別 C、33 組)について、藤花樹本と陳昌治本のどちらが宋本に近いのか、また、宋本との違いの発生時期について検討した。

### 2. 宋本との字形差の発生時期について

清代の康熙～乾隆年間にかけて汲古閣が北宋本の翻刻として出版した、いわゆる「汲古閣説文解字」(以下、汲古閣本)は清代の説文学の基盤として非常に広く参照された。これは、明代に説文として参照されていたテキストが大徐本そのものではなく、南宋代に大徐本の部首排列および部首内排列をそれぞれ『集韻』によって並べなおした『説文解字五音韻譜』<sup>1</sup>であったことを明らかにした影響が大きい。続いて、段玉裁が『汲古閣説文訂』を著して汲古閣本は出版の最終段階で宋本を改めていることを指摘した後、様々

<sup>†</sup> 広島大学

<sup>‡</sup> 在野研究者・会社員

<sup>1</sup> 以下、五音韻譜と略す。現行本のどれでも序文が欠けているが、元代に成立した『文献通考』は『説文解字繫傳』について述べる箇所が李燾の序文が

引かれる。それによれば、李燾が最初に編んだのは大徐本を『類篇』の順序で並べなおした「五音譜」で、これは出版されないままになっており、『集韻』の順序に改めさせて出版したのは虞仲房であると言う。高橋 2002、白石 2016 を参照されたい。『五音韻譜』の内容には虞仲房も寄与した可能性があるが、本稿では両名を合わせて、李燾らと書く。

な「より宋本に近い翻刻本」が出版された。そのうち、もっとも早いものが藤花樹本であり、その直後に出版されたのが平津館本である。平津館本には多数の翻刻本が作られ、その中のレイアウトを引き易く改めた陳昌治本が広く用いられるようになった。また、民国期には王昶・陸心源旧蔵本<sup>2</sup>の影印が出版された。

これらの宋刊小字本<sup>3</sup>には、欠筆の状況から南宋刊本と考えられ、また誤刻と思しきものも見える<sup>4</sup>。汲古閣本は北宋刊本を翻刻したという触れ込みで出版されたため、これらの翻刻本が出版された後にテキスト校訂が進むと、「北宋期には汲古閣本の行款で彫られた宋刊大字本<sup>5</sup>があり、現存する宋刊小字本とは異なっていたのではないか。最終的な汲古閣本には問題があるとしても、汲古閣が利用した宋刊大字本のほうがより大徐本原本に近いのではないか。」と考える研究者も少なくなかった。しかし、高橋由利子氏の研究(高橋 1995、高橋 1997)により、そのような「宋刊大字本」が汲古閣に伝わったわけではなく、汲古閣本の底本は明代の趙靈均写本であることが判った。当初は趙靈均写本の底本として「宋刊大字本」の存在もまだ考えられていたが、近年の白石 2017、王 2020、董 2020 などの研究により、趙靈均写本は五音韻譜の明板のテキストを並べなおして作られたものであることが判った。

## 2.1 藤花樹本と宋本の関係

藤花樹本は、額勒布が鮑漱芳所蔵の宋刊本を翻刻したとするものである。中国国家図書館に残る海源閣旧蔵の宋刊本には額勒布の印記があるので、これが底本と考えられている<sup>6</sup>。前世紀においては影印が流通した宋刊小字本は王昶本のみだったため、王昶本と藤花樹本に違いがあつて汲古閣本に近いことが知られていたが(周 1966<sup>7</sup>、鈴木 2017)、それが藤花樹本の改変かどうかは判断が困難であった。今世紀に入り、中華再造善本によって海源閣本の影印が出版され、またさらにモノクロの安価な影印本も流通するようになった結果、藤花樹本が底本をどの程度改変しているかも評価可能となった。董 2019b は「宋刊小字本を用いてはいるが、清代の汲古閣本の影響も大きい」ことを明らかにした。

## 2.2 陳昌治本と宋本の関係

陳昌治本は、平津館本の正文小篆が必ず行頭に並ぶように体裁を改め、検索の便を図ったものである。平津館本を出版した孫星衍はどの底本に基づいたかを明らかにしていない。そのため、前世紀においては王昶本の影印と比較され、その差異を孫氏の妄改と批判されることが多かった<sup>8</sup>。董 2018 では孫氏の事蹟を追跡し、平津館本の底本もまた海源閣本であると結論づけた<sup>9</sup>。従って、藤花樹本と陳昌治本は同じ宋刊小字本を祖とする翻刻本ということになる。

平津館本は底本の誤字をそのまま残す方針で翻刻したことを孫氏が序文に書いているが、小篆は顧千里の手によると別に書いており、それを顧千里が変更した部分もあると理解すべきなのかは明らかでない。

## 2.3 本稿の問題設定

藤花樹本と陳昌治本は海源閣本を祖とする翻刻本であるので、海源閣本と比較することによって「どちらがより宋本の姿を残すか」が評価できる。どちらも同じように改変を加えたものについては除外されるが、藤花樹本と陳昌治本の相対評価という観点では問題無いであろう。

陳昌治本における差異の発生時期については、平津館本の段階で改められたものと、陳昌治本の段階で改められたものの2つを考えることができる。厳密には、陳昌治本にも何回か補修が加わっているらしく、小篆字形にも違いがあることが知られるが(田 2003、胡 2017、および鈴木・塚田 2020)、陳昌治本初印以降のものをまとめて考えることとする。

藤花樹本における差異の発生時期はやや複雑である。藤花樹本は海源閣本と汲古閣通行本、さらには『汲古閣説文訂』の記述を混ぜたものと考えられるが、汲古閣通行本は明板五音韻譜を並べなおしたものを小徐本によって改めたものであるから、宋刊小字本との差異を全て汲古閣以降のものと言うことはできない。宋板五音韻譜・明板五音韻譜から使われている字形であれば、清代の翻刻本の中では藤花樹本しか用いない字形であっても、古籍のデジタル化における必要性は考慮すべきものとなる。本稿では、藤花樹本に至る段階として、海源閣本、宋板五音韻譜、明板五音韻譜、汲古閣未改本、汲古閣通行本を考え、どの段階で改められたものかを調べる。

本稿では小篆字形の歴史的な変遷を対象とし、説解との整合性は調査していない。そのため、「藤花樹本と陳昌治本のどちらが正しいか」という文字学的な正誤は扱わない。これは、藤花樹本や陳昌治本の編纂の際の「正しさ」が説解優先なのか、典拠の存在優先なのか、編者の姿勢がまだはっきりしていないためである。

## 3. 調査方法

本稿では海源閣本、宋板五音韻譜、明板五音韻譜、汲古閣四次様本(淮南書局翻刻)、藤花樹本(原本)、陳昌治本(中華書局本)、平津館本(五松書屋本)だけを示す。汲古閣四次様本と藤花樹本が異なる場合、また、汲古閣本と平津館本も異なる場合は汲古閣通行本(いま早稲田大学所蔵本による)も参照したが、大半が四次様本と同じであるので(本稿の調査範囲は全体で122組を調査したが、汲古閣四次様本と通行本で違いがあるのは4例のみであった)、本稿ではその列

<sup>2</sup> 日本では「岩崎本」と呼ばれることが多いが、ここでは『汲古閣説文訂』に従い「王昶本」と呼ぶ。

<sup>3</sup> 五音韻譜や汲古閣本は全て1ページあたり7行であるのに対し、王昶本その他の宋刊説文解字は全て1ページあたり10行である。後者の行款を持つ宋刊大徐本をこのように呼ぶ。宋刊小字本の行款を持つ五音韻譜は知られていないので、以下「宋刊小字本」は五音韻譜でない大徐本を指す。

<sup>4</sup> たとえば、「右」が又部と口部に掲出されているような状況については、編者の徐鉉が重複を疑う語を書き込んでおり、小徐本も2箇所掲出している。大徐本成立時点からあつたことに疑いはない。しかし、「誤」がほぼ同じ説解で言部に2回掲出されているような状況については、徐鉉による案語もなく、小徐本にも見えない。そのため、大徐本成立時点からあるものではなく、宋刊小字本特有の問題と疑うこともできる

<sup>5</sup> そのような行款で彫られた宋刊大徐本が実際に見つかったわけではなく、

現存する宋刊小字本との対比の都合で導入された名称である。

<sup>6</sup> 王 1999 のように鮑漱芳の印記が無いためにこれを疑う説もある。

<sup>7</sup> p.763 に「至於鈕氏說文校録所云宋本與嚴章福說文校議所云宋本、皆與王氏宋本相近。嚴可均說文校議云宋本、即孫氏所遺之本、而兼襲汲古閣説文訂之說。鮑本則介於毛本王本之間、然亦有與孫本同者。蓋彼等皆未述及所見宋刻之版式及其內容、故頗難斷定其所也。」とある。

<sup>8</sup> たとえば丁福保『説文詁林』の序文など。商務印書館の王昶本の影印は加筆が多いと従来指摘されており(倉田 1939、鈴木 2019、王 2019)、最近になってその加筆の根拠は平津館本であることが明らかにされた(董 2019a)。

<sup>9</sup> 北京大学所蔵の趙靈均旧蔵の宋刊小字本残本に孫星衍の印記が見え、これを底本とする説もあるが、テキストとしては、平津館本は北大所蔵本より海源閣本に近い(董 2019a)。

は省略した。対応する現代漢字から明板五音韻譜 2 種・汲古閣四次様本字形を確認するツール(<https://gl.github.com/mpsuzuki/mkHtml.rb/-/raw/search-wyyp-dev/searchWYYP.html>)には汲古閣通行本へのリンクも含めてあるので、そちらを利用されたい。

### 3.1 今回新たに加えた資料

#### 3.1.1 海源閣本について

海源閣本は中華再造善本ではじめて影印が出版されたが、本稿ではその後國學基本典籍叢刊の中で出版された影印を用いる。國學基本典籍叢刊はモノクロの網点印刷であり、実質的な解像度は高くないが、コントラストを高くして背景を完全に白くするなどの加工はしていない<sup>10</sup>。

#### 3.1.2 宋板五音韻譜について

清代の汲古閣本の刊行により、それまで広く通行していた五音韻譜の評価は大きく低下した。その結果、四庫全書などでも五音韻譜の複製は作られていない。書誌学的な情報もあまり整備されなかったらしく、宋刊本は 12 巻のうち 1 巻のみの残本しか知られていなかった(高橋 2002)。続修四庫全書でも明刊本を収めている。今世紀に入り、中国書店が汲古閣旧蔵の完本宋刊五音韻譜を入手し、その精細な複製本を出版した。本稿ではこれを用いる。

#### 3.1.3 明板五音韻譜(のうち、白口本)について

明代の五音韻譜の翻刻には様々な版があるが(高橋 2002、白石 2017、王 2020)、広く通行した版としては、萬曆年間の陳大科本、天啓年間の世裕堂本がある。汲古閣本の底本と目される趙壹均写本は、この 2 つではなく、「白口左右雙邊本」と呼ばれる刊行者不明の版を趙宦光所蔵の宋刊小字本によって並べなおしたものと考えられている。これに関しては高橋 2002 での分析では世裕堂本の異本の一つとして紹介されていたが、白石 2017、王 2020、董 2020 は詳細なテキスト比較の結果、むしろ世裕堂本の底本に繋がるものと推測した。日本国立公文書館がデジタル画像を公開しているので、本稿はこれを用いた。

### 3.2 TCA のフォントでなく藤花樹本を対象とすることについて

前稿で報告したように、TCA による ISO/IEC 10646 への提案字形は、現時点では清代の木版印刷の藤花樹本と、民国期の石印本の藤花樹本、さらにフォント作成の最中に書き変えたものが混ざったものとなっており、書誌学的な分析とは区別して扱いたい。そのため本稿では清代の木版印刷の藤花樹本について調べる。

## 4. 調査結果

調査対象のグリフと、その分類判定を並べたものを表 1、2 に示した。項番は ISO/IEC JTC1/SC2/WG2 に寄書として提出した WG2 N5133 に準ずる。これは同様の字形差が並ぶように整理しているので、大徐本や五音韻譜の掲出順序とは異なる。表中の seq 欄は大徐本での小篆通し番号(DX)、五音韻譜での小篆通し番号(WY)を示す。前述の検索ツールでも使用可能である。

### 4.1 字形差発生時期の種別

本稿では種別 B, C の字形差の発生時期に関して、以下のように分類した。

#### ● 共通の種別

- 同海: 海源閣本の字形が採用されたと思われるもの
- 宋改: 宋板五音韻譜で改められ、汲古閣本を経由して採られたと思われるもの
- 明改: 明板五音韻譜で改められ、汲古閣本を経由して採られたと思われるもの
- 毛改: 明板五音韻譜から汲古閣本四次様本に至る間に改められ、それが採られたと思われるもの
- 毛 5 改: 汲古閣が四次様本から通行の五次修訂本に修正する際に改められ、それが採られたと思われるもの

#### ● 藤花樹本特有の種別

- 藤改: 海源閣本とも汲古閣本とも異なり、藤花樹本の出版の際に改められたと思われるもの

#### ● 陳昌治本特有の種別

- 孫改: 海源閣本とも汲古閣本とも異なり、平津館本が改めたとと思われるもの
- 陳改: 平津館本と陳昌治本が異なるもの

表 1: 種別 B の小篆字形の各本状況と字形差の発生時期

#	seq	海	宋五	白口	毛4	藤初	陳	孫	comment
#001	DX00193 WY09179								韉/藤:毛改, 陳:同海
#002	DX01600 WY10857								韉/藤:宋改, 陳:同海
#003	DX01623 WY09516								韉/藤:毛改, 陳:同海
#004	DX02281 WY05054								韉/藤:明改, 陳:同海
#005	DX05642 WY07388								附:藤:同海, 陳:宋改
#006	DX06921 WY07384								韉/藤:同海, 陳:孫改
#007	DX07540 WY05231								吳/昇:藤:藤改, 陳:同海
#008	DX07548 WY09476								翼:藤:宋改, 陳:同海
#009	DX09900 WY04029								韉/藤:明改, 陳:孫改
#010	DX10254 WY04683								數/數:藤:宋改, 陳:同海
#011	DX07312 WY05882								覆/焦:藤:宋改, 陳:同海
#012	DX00662 WY05486								藍/藍:藤:同海, 陳:孫改
#013	DX04571 WY07424								豚:藤:同海, 陳:宋改
#014	DX00429 WY05521								蓄:藤:藤改, 陳:同海

<sup>10</sup> 董氏の私信では、中華再造善本の影印は朱筆の書き入れを本来の版で刷られたもののように着色したミスなどがあるとのことである。また、マイクロフィルムからそのままデジタル化したと思われる画像が北京国家圖書

館の中華古典籍資源庫で最近公開が開始されている模様であるが、画像の一括ダウンロードなどは提供されていない。

#	seq	海	宋五	白口	毛4	藤初	陳	孫	comment
#015	DX07743 WY02762								𪗇/藤:同海, 陳:陳改
#016	DX08202 WY03663								𪗈/藤:宋改, 陳:同海
#017	DX01607 WY09716								𪗉/藤:同海, 陳:宋改
#018	DX03643 WY09693								𪗊/藤:同海, 陳:陳改
#019	DX08430 WY07486								𪗋/藤:藤改, 陳:同海
#020	DX08347 WY03278								𪗌/藤:藤改, 陳:同海
#021	DX01796 WY01164								𪗍/藤:藤改, 陳:同海
#022	DX01083 WY01141								𪗎/藤:毛改, 陳:同海
#023	DX00465 WY05481								𪗏/藤:宋改, 陳:同海
#024	DX03767 WY10634								𪗐/藤:同海, 陳:陳改
#025	DX06345 WY07091								𪗑/藤:毛5改, 陳:同海
#026	DX06346 WY07092								𪗒/藤:毛5改, 陳:同海
#027	DX11061 WY06283								𪗓/藤:宋改, 陳:同海
#028	DX07111 WY08434								𪗔/藤:同海, 陳:陳改
#029	DX00195 WY09162								𪗕/藤:宋改, 陳:同海
#030	DX09665 WY10541								𪗖/藤:同海, 陳:宋改
#031	DX08048 WY03538								𪗗/藤:同海, 陳:宋改
#032	DX07209 WY04970								𪗘/𪗘/𪗘/藤:宋改, 陳:同海
#033	DX08591 WY00513								𪗙/𪗙/藤:宋改, 陳:孫改
#034	DX02380 WY07850								𪗚/藤:毛5改, 陳:同海
#035	DX04878 WY04898								𪗛/藤:藤改, 陳:同海
#036	DX08640 WY00533								𪗜/藤:同海, 陳:陳改
#037	DX00949 WY06807								𪗝/𪗝/藤:毛改, 陳:同海
#038	DX02618 WY00141								𪗞/藤:同海, 陳:孫改
#039	DX00279 WY09725								𪗟/𪗟/𪗟/藤:明改, 陳:同海
#040	DX02951 WY09410								𪗠/藤:同海, 陳:陳改
#041	DX06479 WY00612								𪗡/藤:同海, 陳:孫改
#042	DX07259 WY00043								𪗢/藤:同海, 陳:孫改
#043	DX08062 WY03710								𪗣/藤:宋改?, 陳:同海

#	seq	海	宋五	白口	毛4	藤初	陳	孫	comment
#044	DX01670 WY01332								𪗤/藤:同海, 陳:陳改
#045	DX02825 WY05121								𪗥/藤:同海, 陳:陳改
#046	DX09054 WY06603								𪗦/藤:同海, 陳:陳改
#047	DX09715 WY10462								𪗧/藤:同王, 陳:陳改
#048	DX02544 WY07303								𪗨/藤:同海, 陳:宋改
#049	DX08428 WY06160								𪗩/藤:藤改, 陳:同海
#050	DX01335 WY09802								𪗪/藤:同海, 陳:孫改
#051	DX05510 WY06099								𪗫/𪗫/藤:宋改, 陳:同海
#052	DX110331 WY01664								𪗬/藤:藤改, 陳:同海
#053	DX05246 WY01741								𪗭/藤:同海, 陳:陳改
#054	DX06198 WY00987								𪗮/藤:同海, 陳:陳改
#055	DX06219 WY08408								𪗯/藤:藤改, 陳:陳改
#056	DX09140 WY04396								𪗰/𪗰/藤:明改, 陳:同海
#057	DX01969 WY03163								𪗱/藤:藤改, 陳:同海
#058	DX04551 WY07416								𪗲/藤:明改, 陳:同海?
#059	DX07344 WY05778								𪗳/𪗳/藤:宋改, 陳:同海?
#060	DX00476 WY05678								𪗴/藤:宋改, 陳:同海
#061	DX02754 WY05152								𪗵/𪗵/藤:明改, 陳:陳改
#062	DX06740 WY07116								𪗶/藤:藤改, 陳:同海
#063	DX07315 WY05855								𪗷/藤:同海, 陳:陳改
#064	DX09486 WY06045								𪗸/藤:宋改, 陳:明改
#065	DX00654 WY05628								𪗹/藤:同海, 陳:宋改
#066	DX06926 WY01539								𪗺/藤:宋改, 陳:同海
#067	DX07304 WY05833								𪗻/藤:明改, 陳:同海
#068	DX01871 WY01426								𪗼/藤:宋改, 陳:同海?
#069	DX08707 WY01535								𪗽/藤:宋改, 陳:同海
#070	DX06034 WY00378								𪗾/𪗾/藤:明改, 陳:同海
#071	DX01886 WY01244								𪗿/藤:毛改, 陳:同海
#072	DX03197 WY01907								𪘀/藤:毛改, 陳:同海

#	seq	海	宋五	白口	毛4	藤初	陳	孫	comment
#073	DX04711 WY10988								鄒/藤:同海, 陳:宋改
#074	DX09095 WY06545								攬/攬:藤:同海, 陳:陳改
#075	DX09681 WY10413								纒/藤:同海, 陳:陳改
#076	DX09998 WY03998								纒/纒:藤:明改?, 陳:同海
#077	DX04690 WY10888								鄺/藤:藤改, 陳:明改
#078	DX01342 WY09812								德/邊:藤:毛改, 陳:同海
#079	DX01344 WY09899								邊/藤:同海, 陳:宋改
#080	DX08986 WY06660								揅/藤:同海, 陳:孫改
#081	DX10757 WY02185								輶/藤:毛改, 陳:同海
#082	DX04877 WY04877								舩/藤:毛5改, 陳:同海
#083	DX02589 WY04490								翳/翳/藤:毛改, 陳:同海
#084	DX03404 WY08880								舩/藤:毛改, 陳:同海
#085	DX05811 WY00975								億/藤:宋改, 陳:同海
#086	DX08746 WY01482								關/關:藤:同海, 陳:宋改
#087	DX00694 WY05344								薪/藤:明改, 陳:同海
#088	DX07957 WY03614								灑/藤:宋改, 陳:孫改
#089	DX08275 WY03618								漢/藤:藤改, 陳:同海

表 2: 種別 C の小篆字形の各本状況と字形差発生時期

#	seq	海	宋五	白口	毛4	藤初	陳	孫	comment
#001	DX01624 WY09517								齋/藤:同海, 陳:宋改
#002	DX01767 WY01334								訖/藤:同海, 陳:宋改
#003	DX02183 WY07725								良/藤:同海, 陳:宋改
#004	DX02705 WY05134								鸞/藤:毛改, 陳:同海
#005	DX02930 WY09451								癩/藤:藤改, 陳:同海
#006	DX03088 WY08631								脛/藤:明改, 陳:同海
#007	DX03907 WY07515								羸/藤:藤改, 陳:陳改
#008	DX04540 WY07439								贛/贛:藤:同海, 陳:孫改
#009	DX06113 WY05244								書/藤:藤改, 陳:同海

#	seq	海	宋五	白口	毛4	藤初	陳	孫	comment
#010	DX06924 WY07385								豸/藤:宋改, 陳:同海
#011	DX08271 WY03507								淮/淮:藤:藤改, 陳:毛改
#012	DX08614 WY04993								鮫/藤:同海, 陳:宋改
#013	DX09662 WY10533								綉/藤:同海, 陳:宋改
#014	DX10405 WY10757								勢/藤:毛改, 陳:同海
#015	DX04338 WY08400								根/藤:同海, 陳:宋改
#016	DX05279 WY01789								窳/藤:藤改, 陳:同海
#017	DX05310 WY09687								突/突:藤:明改, 陳:同海
#018	DX05311 WY09686								窳/藤:藤改, 陳:同海
#019	DX09278 WY04439								窳/藤:藤改, 陳:同海
#020	DX10054 WY01439								窳/窳:藤:藤改, 陳:同海
#021	DX09125 WY04446								灼/藤:藤改, 陳:同海
#022	DX06728 WY07113								廚/廚:藤:藤改, 陳:同海
#023	DX09322 WY04401								嫗/藤:宋改, 陳:同海
#024	DX09653 WY10509								纒/藤:同海, 陳:陳改
#025	DX05906 WY00897								廚/藤:宋改, 陳:同海
#026	DX00447 WY05342								鞞/藤:藤改(避諱), 陳:同海
#027	DX05624 WY09364								鞞/藤:明改, 陳:同海
#028	DX05440 WY10020								瘞/藤:明改, 陳:同海
#029	DX02244 WY00632								殺/藤:藤改, 陳:同海
#030	DX08812 WY06595								掌/藤:藤改, 陳:同海
#031	DX07363 WY05885								燿/藤:藤改(避諱), 陳:陳改=同海
#032	DX02880 WY05214								鬲/藤:同海, 陳:宋改
#033	DX06652 WY01648								嶂/嶂:藤:藤改, 陳:同海

平津館本に妄改が多いとした先行研究も、汲古閣本または王昶本の影印が正しく平津館本に問題がある箇所を孫星衍らの妄改と批判することが多く、平津館本が汲古閣本から影響されているかはあまり議論されていない。本稿の調査では、平津館本が海源閣本と異なり、かつ汲古閣本と符合する場合も若干見られた。これを汲古閣本に従ったと見るべきか、孫星衍が新たに加えた改変(汲古閣本とは偶然に一致したに過ぎない)と考えるべきか今判断できないが、藤

花樹本との比較の都合上、汲古閣本に至るまでの資料との符合の状況を記すため、宋改～毛5改の種別も導入している<sup>11</sup>。宋本と平津館本の違いを全て孫星衍らに帰す従来の立場では、これらを全て孫改と分類することになる。

## 5. 考察、今後の課題

### 5.1 考察

表1, 2で判定した種別を整理すると表3のようになる。

表3 推定される字形差の発生時期の分布

	B		C	
	藤	陳	藤	陳
同海	29	50	9	21
宋改	23	11	3	7
明改	10	2	4	0
毛改	10	0	2	1
毛5改	4	0	0	0
孫改		9		1
藤改・陳改	13	17	15	3
総数	89	89	33	33

種別B, Cとも、海源閣本の字形をより多く残しているのは陳昌治本であった。このこと自体は、周祖謨以来の先行研究の結果を支持するものである。またさらに、平津館本から陳昌治本に至る間の改変があるということも、周祖謨が陳昌治本について平津館本を正しく翻刻していないと批判したことと符合する<sup>12</sup>。

字形差が比較的小さい種別Bにおいては、藤花樹本や陳昌治本の出版の際に追加された改変(藤改・陳改)が15～19%あり、この割合に大きな差は無いように思える。藤花樹本においては宋板五音韻譜から汲古閣本に至るまでに加わった改変(宋改+明改+毛改+毛5改)が多く、海源閣本の字形を残す割合が減ったと言える。一方、海源閣本と平津館本の間にも違いがあるが、主に宋板五音韻譜での改変(宋改)に符合するものであり、その数も藤花樹本の半分以下である。さらに、藤花樹本は汲古閣による改変(毛改+毛5改)を14箇所採るのに対し、平津館本は採っていないという違いも見える。

字形差が比較的大きい種別Cにおいては、藤花樹本の出版の際に新たに加わった改変(藤改)が、陳昌治本の出版の際に新たに加わった改変(陳改)よりずっと多く、宋板五音韻譜～汲古閣本の過程で加わったもの(宋改+明改+毛改+毛5改)よりも多い。このことから、底本の字形に問題があると考えたものに対して、平津館本・陳昌治本はある程度それらを残すのに対し、藤花樹本は底本のどれにも見えない字形となっても改めるという姿勢であったことが窺える。本稿では字形差の歴史的な段階に注目することとし、文字学的な正誤判定をしなかったが、種別Bの項番005のように藤花樹本だけが海源閣本の字形に従っている事例もあることには注意が必要である。

もう一つの知見として、宋刊小字本と汲古閣未改本の違

いの発生時期についても、宋代まで遡れるものが多いことが判った。段玉裁の『汲古閣説文訂』以降、これまで王昶本をはじめとする宋刊小字本と汲古閣通行本を比較した場合の違いは、汲古閣の最後の修訂で小徐本を用いたためで、それ以前の「未改本」は宋刊小字本に近いと理解されてきた。鈴木2017で報告したように宋刊小字本と汲古閣四次様本にも多くの違いがあるが、今回の調査により、宋板五音韻譜で既に改められていた可能性が小さくないことが判った。

またさらに、汲古閣本や平津館本などの通行の版本の校訂から拡充させた先行研究(段玉裁『汲古閣説文訂』、嚴可均『説文校議』、周祖謨『孫星衍平津館重刊宋本説文解字校勘記』など)で版本間の差異に言及された箇所では「平津館本だけが改めた箇所」は少ないという結果を得るが(鈴木2017)、平津館本にも宋本の小篆の誤りを修正したものがあることが判った。

### 5.2 今後の課題

#### 5.2.1 前稿の種別Aについて

本稿では予備的な調査として比較的字形差が目立つ種別B, Cを調べ、藤花樹本よりも陳昌治本のほうが底本となった海源閣本の小篆をより多く残していることが判ったが、陳昌治本であっても海源閣本と異なる小篆の割合は無視できない。ただし、これは種別B, Cを母数とした場合の割合であって、その母数の合計(89+33=122字)は説文全体の小篆数(11108字)に比べれば1%程度に過ぎない。種別A(微細なデザイン差、632字、5.7%)も調査することが望ましい。

#### 5.2.2 宋刊小字本と平津館本の比較について

本稿では「平津館本がその底本である海源閣本の小篆を修正している」という状況が見つかった。筆者の一人は以前各種の先行研究が報告した宋本と清代翻刻本の差を整理し(鈴木2017)、平津館本が王昶本・汲古閣本・藤花樹本のどれとも異なる小篆を示している場合でも、それは底本に由来するものであって、平津館本が改変したものではないと考えたが、この判断は改めねばならない。これは、先行研究の多くが「許慎原本、あるいは大徐原本ではこうであった筈」と想定する状況からのずれを調べるという考え方で整理されたものであって、宋本の誤りを全て書き出すという考え方はなかったための限界であろう。これらの先行研究を、正誤判断を伴わない書誌学的な調査として扱うのは不適切で、書誌学的観点の調査は別の課題として残っている。

#### 5.2.3 宋板五音韻譜の調査について

本稿では簡単のため、「宋板五音韻譜の時点で字形差がある」と分類したが、宋板五音韻譜と同様の小篆字形を持つ大徐本が南宋期に存在し、それが用いられた可能性も残るため<sup>13</sup>、この字形差を全て李燾らの改変とは断定しきれない。五音韻譜の序文と李燾の事跡から、五音韻譜のテキストの成立は南宋孝宗期の最後の淳熙年間と考えられている(白石2016)。また、現存する8種の宋刊小字本も、版面に様々な違いがあるが、避諱の状況から<sup>14</sup>、やはり孝宗期に彫られた1セットの版本が元代まで補修を繰り返しながら

<sup>11</sup> 筆者未見であるが、孫星衍および顧千里の校語が残る汲古閣本が2種残っており(『中國古籍善本書目』, p.150の319, 320番)、汲古閣本の影響を完全に否定することはできない。また、平津館本の序文で参照されている汲古閣本は京大人文研が画像公開している「翻刻甲種本」と思われ、若干の違いがある。翻刻本については董2020を参照されたい。

<sup>12</sup> 周1966のp.761において「其中平津館本謬字較少」とした後、平津館本の翻刻本を列挙し「而謬字較多矣」と評する。

<sup>13</sup> そのような大徐本がかって存在したとしても、藤花樹本や平津館本が参照したのは海源閣本であるので、これら翻刻本が底本の小篆をどこまで残すかの分析には影響しない。

<sup>14</sup> 宋板五音韻譜の各巻冒頭は全て「許氏」となっている。一方、宋刊小字本の各巻冒頭は「許氏」であったり、「慎」を欠筆したり、空格であったり(後人が書き加えるなどしている)、どのように避諱に対応するかが不統一である。避諱に対応していない巻頭も少なくない。

ら刷られた一群と考えられている(董 2020)。従って、李燾らが参照した大徐本は現存する宋刊小字本と同版だったと考えても時間的な無理はない<sup>15</sup>。しかし現存の宋刊小字本は、版心に残る刻工名から、4割程度の版木が元代に補修を受けたと推測されており(董 2020)、李燾らが用いた大徐本のテキストが海源閣本と完全に同一とまでは言い切れない。版木の補修状況を勘案した議論も必要と思われる。

また、宋板五音韻譜についても、本稿で参照した中国書店本は重刊本であり、さらに一部は失われて補写となっている<sup>16</sup>。中国書店本の他に4種の宋板本が残ることが知られるが、それらが同版かはまだ明らかでない。今後の調査が望まれる。

## 謝辞

本研究は科研費課題番号 16K004600A, 19K12716 の成果を含みます。高橋由利子先生、大西克也先生、笹原正之先生、白石将人先生、董婧宸先生、川幡太一氏、大居司氏、中山陽介氏、大熊肇氏には有益な議論を頂きました。深く感謝いたします。

## 参考文献

- 許慎:『宋本説文解字』(海源閣本), 國學基本典籍叢刊, 國家圖書館出版社(北京), ISBN 978-7501360253.
- 許慎:『説文解字十五卷 埴谷古閣説文解字校記一卷』(淮南書局翻刻本), 京都大学人文科学研究所蔵, 東方 經-X-2-7, <http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/toho/html/A024menu.html> (2021-02-16 閲覧).
- 許慎:『説文解字 第 1-15』(汲古閣通行本), 早稲田大学図書館蔵, 請求記号 ホ 04 00023, [https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ho04/ho04\\_00023/index.html](https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ho04/ho04_00023/index.html) (2021-02-16 閲覧).
- 許慎:『説文解字 第 1-15』(藤花樹本), 早稲田大学図書館蔵, 請求記号 ホ 04 00025, [https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ho04/ho04\\_00025/index.html](https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ho04/ho04_00025/index.html) (2021-02-16 閲覧).
- 許慎:『説文解字』(平津館本), 国立公文書館蔵, 請求番号 371-0043.
- 許慎:『説文解字』(陳昌治本), 中華書局本, ISBN 9787101002607.
- 段玉裁:『汲古閣説文訂』, <https://archive.org/details/02076393.cn> (2021-02-16 閲覧).
- 馬端臨:『文獻通考』, 卷 189, 經籍 16. 明・慎独齋刊本が国会図書館のデジタルアーカイブで公開されている。 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11446368/101> (2021-02-27 閲覧).
- 李燾:『重刊許氏説文解字五音韻譜』(宋板本), 中國書店(北京), ISBN 978-7-5149-0419-2.
- 李燾:『重刊許氏説文解字五音韻譜』(白口本), 国立公文書館蔵, 請求番号 278-0153, <https://www.digital.archives.go.jp/das/image/F1000000000000094715> (2021-02-16 閲覧).
- 王輝、周豔茹 (2019):「説涵芬樓影印宋版《説文解字》對原本的改動及依據」, 山東大学中文学報, 2019 年第 2 期, p. 83-87, ISBN 9787209117050.
- 王輝 (2020):「明抄大字本《説文解字》底本考論 - 兼説宋刊

- 《説文》是否有大小字之分」, 文史, 2020 年第 2 輯, 總第 131 輯, p.231-244, doi 10.19325/j.cnki.11-1678/k.2020.02.011.
- 王貴元 (1999):「《説文解字》版本考述」, 古籍整理研究學刊, 1999 年第 6 期, p.34,41-43.
- 倉田淳之助 (1939):「説文展觀餘録」, 東方學報(京都) 第 10 冊第 1 分冊, p.145-154.
- 胡永鵬 (2017):「陳昌治刻本《説文解字》考略」, 語文教學之友, 2017 年 4 月, p.43-46.
- 白石将人 (2016):「李燾改変《説文解字五音韻譜》的歷史意義」, 文史新探, 總第 98 期, No.3, p.63-68.
- 白石将人 (2017):「《説文解字五音韻譜》版本綜述」, 中國經學, 第 20 輯, p.125-137.
- 周祖謨 (1966):『問學集』, 中華書局 (1966-01), 下卷.
- 鈴木俊哉 (2016):「清刊大徐本説文解字の版本評価の再検討に向けて」, 環境科学研究 II, Vol. 11, p.77-100, doi 10.15027/42559.
- 鈴木俊哉 (2017):「『説文校議』に見える「宋本」と平津館本の関係について」, 環境科学研究 II, Vol. 12, p.11-35, doi 10.15027/45239.
- 鈴木俊哉 (2019):「續古逸叢書・四部叢刊における岩崎本説文解字影印の画像比較」, 2.0 版, 2019-03-14, <https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046886> (2021-02-16 閲覧).
- 鈴木俊哉、塚田雅樹 (2020):「ISO/IEC 10646 に提案された小篆フォントの字形について」, 情報処理学会研究報告 (D C), 2020-DC-117 (3), p.1-8 (2020-07-03).
- suzuki toshiya (2020):“Comparison table of N5105 proposal (of Shuowen Seal) and Changzhi's version”, (2020-04-01), ISO/IEC JTC1/SC2/WG2/N5133.
- 高橋由利子 (1995):「『説文解字』毛氏汲古閣本について」, 汲古, Vol. 27, p.27-38.
- 高橋由利子 (1997):「段玉裁の『汲古閣説文訂』について」, 中国文化, Vol. 55, p.37-52.
- 高橋由利子 (2002):「和刻本『説文解字五音韻譜』の依拠した版本について」, 中国文化, Vol. 60, p.11-23.
- 田泉 (2003):「五種陳刻本《説文》文字互異同举例」, 古籍整理研究學刊, 2003 年第 3 期(5 月), p.72-73, ISSN 1009-1017.
- 董婧宸 (2018):「孫星衍平津館仿宋刊本《説文解字》考論」, 勵耘語言學刊, 2018 年第 1 輯, 總第 28 輯, p.219-234, doi 10.13554/b.cnki.liyunyuan.2018.01.015.
- 董婧宸 (2019a):「宋元遞修小字本《説文解字》版本考述——兼考元代西湖書院的兩次版片修補」, 勵耘語言學刊, 2019 年第 1 輯, 總第 30 輯, p.80-105, doi 10.13554/b.cnki.liyunyuan.2019.01.008.
- 董婧宸 (2019b):「藤花樹本《説文解字》底本及校刊考」, 文獻, No. 6, p.47-61, ISSN 1000-0437.
- 董婧宸 (2020):「毛氏汲古閣本《説文解字》版本源流考」, 文史, 2020 年第 3 輯, 總第 132 期, p.187-216, doi 10.19325/j.cnki.11-1678/k.2020.03.008.

<sup>15</sup> 次代の光宗以降の諱をどの程度避けているかは判断が難しい。宋刊小字本、宋板五音韻譜とも清代の避諱に比べて欠筆などが徹底しておらず、各巻冒頭の許慎の「慎」は避けていても、小篆や説解の「慎」はそのままである。

<sup>16</sup> 例えば巻 10 葉 48、51 は全体が補写で補われている。